

Awaji Yumebutai International Conference Center

## 第21回アジア太平洋研究賞受賞者

氏名および論文名	論文の概要	選考理由
<sup>おおたに</sup> とおる 大谷 亨 無常鬼の研究 〈精怪〉から 〈神〉への軌跡	小論は、無常鬼という死神を事例に、中国で 妖怪学が実践可能であること、妖怪学によって 中国文化論が更新可能であることを主張するも のである。 漢民族の民間信仰において妖怪が重要な役割 を果たしている可能性はつとに指摘されなが ら、必ずしも十分に考察されてこなかった。そこで小論は、広く中国文化圏で神として信仰さ れる無常鬼に着目し、無常鬼が元来妖怪であっ たことを日本民俗学の重出立証法を援用し立証 を試みた。 結果、山魈や摸壁鬼という妖怪が神化し、無 常鬼へと変容する過程が明らかとなった。これ により、神々のルーツに少なからず妖怪がいた 可能性を示唆するとともに、等閑視されてきた 妖怪伝承の資料的重要性を示すことができた。	中国の各地、また東南アジアでもよく見るこ との多い無常鬼を扱った論文であるが、無常鬼 についての専論は日本ではほぼ皆無であり、そ れだけで優れた価値を有するものである。 無常鬼を取り上げている魯迅のエッセイや 『玉暦宝鈔』についてもよく検討されている が、特に優れているのは、無常についてフィー ルドワークを行い、各地の無常の相違点につい て丹念に調べていることである。 その膨大な無常鬼の比較研究は、妖怪学もさ ることながら、中国における民間信仰に関する 新たな知見であり、信仰の対象となるものがど のように成立するのかという宗教全般の問題へ 外挿される可能性が感じられることからも、ア ジア太平洋研究賞に値するすぐれた論文と評価 できる。
らあじゃぶん 拉加本 チベット・アムド地域における 村落社会と信仰生活の変容に関 する人類学的研究 一中国青海省海南チベット族 自治州貴南県ボンコル村の事例 から 本賞	本論文の目的は、チベットの伝統的三大地域 の一つアムド地域に居住するチベット人の宗教 活動の分析に基づき、チベット仏教一辺倒では ない信仰生活の実態を村の生活者の視点から明 らかにすることである。調査地は中国青海省海 南チベット族自治州貴南県ボンコル村を選定 し、村人が実践している道教起源の守護神信 仰、仏教徒が行うボン教的浄化儀礼、仏教徒と ボン教徒が共に祀る山神信仰などの宗教活動を 記述し考察した。 結論として、村人の信仰活動には現世利益を 求める民間信仰と、来生の、あるいは一切衆生 の救済といった高度な教義を求める信仰という 二つの方向性があるが、それらが矛盾すること なく併存し関係しあっていることがこの地域の 宗教の混淆性の特徴であると論証した。	中国領有下の青海チベット地方の一村落にお ける複雑に入り組んだ信仰体系について、当該 地域がおかれた歴史的背景や、隣接する他集団 との政治・経済関係、さらには近代国家による 辺境開発がもたらす変容にまで幅広く目配り し、実際の村落社会におけるミクロな宗教実践 の地平に降り立って綿密な記述を行った労作で ある。 青海地方のジャサク・ラマの実像をここまで 立体的に活写したことや、現地調査に基づい て、多義的信仰世界の成り立ちを内側から明ら かにしえたことは貴重な成果である。 これらの成果は、いずれも民衆レベルの信仰 体系に根差した東アジア全体の宗教研究に貴重 な貢献を果たしうるものであり、アジア太平洋 研究賞に値するすぐれた論文であると評価でき る。
<sup>おう らく</sup> 王 楽 満洲国農村部における宣撫宣伝 活動のメディア史 <b>佳作</b>	本論文では、これまで蓄積されてきた都市部 を前提とした活字メディアによる戦時期宣伝研 究の枠組みを超え、農村部とそこに居住する多 民族の非識字層に向けた視聴覚メディアによる 宣撫宣伝活動について実証的に検証していくも のである。本論文の目的は、満洲国の農村部で 独自の展開を遂げた「宣撫活動」を研究対象と し、その動態的かつ重層的な実態を明らかにす ることにある。本論文では、宣撫活動の概念の 形成、 制度や組織の歴史的な発展、満洲国での 実施方法の変遷、そして代表的な実践例という 四つのアプローチから宣撫活動のあり方を考察 する。	満洲国農村部における満鉄・満映などの国策 会社や関東軍によるプロパガンダ=宣撫宣伝活 動を一次資料を駆使して包括的に論じた力作で ある。 従来の研究では看過されてきた満洲国農村部 における宣撫宣伝活動について、これまでの研 究史をふまえて意欲的に論証しようとしている 点や、満洲国メディアに関して先行研究が指摘 していることをより深く検証している点が評価 に値する。 あらたな一次資料の発掘がみられず論証不足 の点もあるなどの課題はあるものの、佳作に値 するすぐれた論文と評価できる。

### 第21回アジア太平洋研究賞

#### 論文要旨

無常鬼の研究――〈精怪〉から〈神〉への軌跡

大谷 亨

小論の目的は、中国学に「妖怪学」という研究分野を定着させることにある。その前提 には、中国に息づく豊かな妖怪資源(例えば、妖怪伝承など)が、いまだ有効活用されて いないという現状認識がある。私は、その等閑視されてきた資源を活用し、妖怪学を実践 することで、従来の中国文化論が更新可能であることを示そうとしたのだった。

上記の背景のもと、小論ではアメリカの人類学者らが提起した「〈神〉〈鬼〉〈祖 先〉」 という分析枠組み、及びそこから派生した「〈鬼〉から〈神〉へ」というテーマを批判対象 として議論を進めることとした。これらの先行研究では、〈鬼〉の概念がもっぱら人由来の 〈孤魂野鬼(=幽霊)〉として矮小化され、人を由来としない〈精怪(=妖怪)〉の存在が 等閑視されていた。そこで小論では、〈精怪〉が〈神〉へと変容する事例を調査し、中国の 民間信仰における〈精怪〉の位相を探ることとした。

上記の問題意識のもと、小論は無常鬼という拘魂使者(澤田瑞穂は「死神」と呼んだ) を研究対象とした。なぜなら、くだんの無常鬼には、「〈精怪〉から〈神〉へ」の軌跡を辿 った痕跡が散見されたからである。この仮説は、無常鬼をめぐる通説とは一線を画すもの であったが、無常鬼の変遷史は未だかつて詳しく調査されたことがなかったのである。

小論では、無常鬼について記された文献資料を博捜するとともに、今日共時的に並存す る多様な無常鬼イメージ(廟の塑像であったり民間伝承であったり)をフィールドワーク し、その変遷史を浮上させようとした。

結果、無常鬼とは、山魈や摸壁鬼(という〈精怪〉ども)に淵源をもつ、言わば「精怪 的拘魂使者」であることが明らかとなった。さらに、その精怪性を漂白させながら、今日 広く知られる〈神〉としての無常鬼イメージが形成されるまでの過程も明らかにすること ができた。

上記の試みは、少なからぬ課題を残しながらも、中国妖怪学の方法論や可能性を具体的 に提示する、今後の展開にとっても重要な論考になったと自負している。

### 21st Asia Pacific Research Prize

Abstract

Study of Wuchang Gui : Process of Transition from Monster to God

### Toru Otani

This article aims to firmly establish monster studies as a distinct field of research in Chinese studies. This is based on my awareness that the abundant resources related to monsters in China (such as oral traditions concerning monsters) have not yet been tapped effectively. In this article, my intention was to utilize those neglected resources for the practice of monster studies in order to show that conventional Chinese cultural studies can be updated.

Against this background, the article critically discusses the trichotomous analytical framework of "gods" "ghosts" and "ancestors" advocated by American anthropologists, and the theme of "From ghosts to gods" derived from this framework. Those preceding studies reduced the Chinese concept of "gui (ghosts)" simply to that of "guhun yegui" ("unattended, wild ghosts") of human origin, neglecting the existence of nonhuman *jingguai* (monsters). Therefore, this article examines examples of *jingguai* being transformed into *shen* (gods) to explore the position of monsters in Chinese folk beliefs.

To deal with these questions, for this article, I have chosen messengers sent from the other world to arrest souls called "*wuchang gui*" (which SAWADA Mizuho called "god of death") as the focus of examination. This is because various examples reveal traces of *wuchang gui* transformation from *jingguai* (monsters) to *shen* (gods). While this hypothesis is clearly distinguished from the generally accepted theory on *wuchang gui*, the historical transformation of *wuchang gui* has never been thoroughly examined.

This article tries to shed light on that historical transformation based on detailed inquiries into the wide range of texts on *wuchang gui* and fieldwork on today's synchronic juxtaposition of their various images (such as shrine statues and folklore).

As a result, it has been revealed that *wuchang gui* are a kind of monstrous messengers from the other world that originated from *jingguai*, such as *shanxiao* and *mobi gui*. Furthermore, this article has succeeded in showing the process where the current public image of *wuchang gui* as gods has been created in parallel with the gradual dilution of their monstrous nature.

I am confident that the attempt made in this article has considerable significance for the subsequent development of research because, despite leaving several challenges unsolved, it has submitted specific proposals for a new methodology and possibilities for Chinese monster studies.

### 第21回アジア太平洋研究賞



### 論文要旨

# チベット・アムド地域における村落社会と信仰生活の変容に関する人類学的研究一中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から

拉加本

本論文の目的は、チベットの伝統的三大地域の一つアムド地域に居住するチベット人 の宗教活動の分析に基づき、チベット仏教一辺倒ではない信仰生活の実態を村の生活者 の視点から明らかにすることである。調査地は中国青海省海南チベット族自治州貴南県 ボンコル村を選定した。

まず序論では、本論文の目的を示したうえで、17世紀に始まるチベット学の歴史を たどり、そのなかに本論文を位置づけ研究課題を示した。第1章では、チベット・アム ド地域が、様々な文化が併存し混淆してきた地域であることを明らかにしたうえ、この 地域の化身ラマの支配領域を図示しその影響力を寺領の人々の視点から明らかにした。 続く第2章では、1958年以降、ボンコル村の社会が、ダム建設による村の移転を経て どのように変わったかを論述した。第3章では、ダム建設による宗教施設の移転と村人 の仏教的宗教活動の変化を考察した。第4章では、アムド地域の人々が、漢族が祀る文 昌神をアニェ・ユラ(祖先神)と名づけ、万能の神として受容してきた漢化の現象を描 き出した。第5章では、世俗者の仏教的活動の場マニ堂に注目し、そこで行われてきた 斎戒悔過儀礼をめぐる村人の仏教的な宗教活動について論じた。第6章では、村のボン 教的宗教施設をめぐって、在家祭司の役割について検討し、特に仏教とボン教の混淆が 著しい家庭レベルの儀礼として、仏教徒家庭で行われるボン教的守護神の浄化儀礼につ いて詳述した。

結論では次の点を指摘した。ボンコル村はダム建設による移転によりコミュニティの 結束が強化された。さらに、政府からの移転補償金は村の宗教活動を活性化させ、共同 的儀礼が行われる経済的基盤となった。すなわち、故郷や「伝統」の喪失は、人々を新 たな伝統を創ることに駆り立たせ、その関心が宗教活動に向かわせたと結論づけた。ま た、村人の信仰活動には現世利益を求める民間信仰と、来生の、あるいは一切衆生の救 済といった高度な教義を求める信仰という二つの方向性があるが、それらが矛盾するこ となく併存し関係しあっていることがこの地域の宗教の混淆性の特徴であると論証し た。

### 21st Asia Pacific Research Prize



Abstract

An Anthropological Study on the Transformation of Village Society and Life of Faith in Tibetan Amdo Region: A Case Study of BonSkor, Guinan County, Hainan Tibetan Autonomous Prefecture, Qinghai Province, China

### Lajiaben

The purpose of this dissertation is to reveal the reality of the life of faith of Tibetans living in the Amdo region of Tibet from the perspective of village dwellers, based on an analysis of the religious activities of Tibetans living in the region. *Bon skor* village, Guinan County, Hainan Tibetan Autonomous Prefecture, Qinghai Province, China, was selected as the study site.

First, the introduction sets out the purpose of this dissertation, then traces back to the history of Tibetan studies beginning in the 17th century, places this dissertation within that history and sets out the research questions. Chapter 1 reveals the Tibetan Amdo as a region where various cultures have coexisted and intermingled, and then illustrates the area of incarnate lama rule in the region and its influence from the perspective of the people of the temple area. Chapter 2 discusses how the society of Bon skor village has changed since 1958, following the relocation of the village due to the construction of the dam. Chapter 3 examines the relocation of religious institutions and changes in villagers' Buddhist religious activities as a result of dam construction. Chapter 4 describes the phenomenon of Sinicization, in which the people of the Amdo region have named the Wenchang deity worshipped by the Han Chinese as A myes yul lha (ancestral deity) and accepted him as an all-powerful deity. Chapter 5 focuses on the Mani Hall, the site of Buddhist activities of the seculars, and discusses the Buddhist religious activities of the villagers in relation to the sMyung gnas rituals (repent and purify rituals) that have been held there. Chapter 6 examines the role of the home priests (dPon) in relation to the Bon religious institutions in the village and details the purification rituals of Bon patron deities performed in Buddhist households, particularly as a household-level ritual where there is a significant mix of Buddhism and Bon.

The conclusions noted the following points. Community cohesion in *Bon skor* village was strengthened by the relocation due to the construction of the dam. In addition, government compensation for relocation activated the religious activities of the village and provided an economic basis for communal rituals to take place. In other words, the loss of homeland and 'tradition' drove people to create new traditions, and that interest especially turned them towards religious activities. It was also argued that the religious activities of the villagers are oriented in two directions: folk beliefs seeking worldly benefits and beliefs seeking advanced doctrines such as the salvation of all sentient beings or of the next life. Characteristic of the mixed nature of religion in the region is that those two beliefs are coexisted and related mutually without contradiction.

### 第21回アジア太平洋研究賞 佳作



### 論文要旨

満洲国農村部における宣撫宣伝活動のメディア史

王 楽

満洲国農村部で実施された宣伝活動において重要視されたのが「宣撫」と呼 ばれる活動である。本論文は、宣撫活動における重層的なメディアの利用を手 がかりに、一次資料に基づいて、満洲国農村部の統治政策の実態を実証的に解 明するメディア史研究でもある。

第1章では、宣撫活動の実施にともなう「宣撫」概念の形成について明らか にする。そのうえで、宣撫活動のターゲットの特徴とメディアの独自の特徴を 明らかにする。第2章では、満洲国の宣撫活動のあり方の起源と展開を明らか にするため、宣撫活動の歴史的な発展とその人的・技術的な基盤について分析 する。第3章では、宣撫活動の実施側がより効果的な方法を模索する経緯を明 らかにする。第4章では、人口が分散した満洲国農村部で最も大衆を集められ る宗教的な祭礼とそれと同時に行われる定期市を利用する方法を検討する。終 章では、宣撫活動が現地社会の影響によって変容し、さらに現地社会の変容に 拍車をかけたことを明らかにする。本論文は満洲国農村部の宣撫活動に関する 実証的な歴史研究の空白を埋める試みであると同時に、メディア研究において 「複数のメディア」を統合した分析視座を提供した点に意義がある。



Abstract

## A Media Historical Study of Pacification and Propaganda Activities in Rural Areas of Manchukuo

Le Wang

Propaganda activities in rural areas of Manchukuo called *Senbu* (the meaning of pacification) was emphasized officially by Japanese authorities in Manchukuo. This media-historical research focuses on the multifaceted interpretations of media's utilization in *Senbu* to clarify the actual situation of governance policies in rural areas of Manchukuo based on the primary historical materials.

Chapter 1 elucidates the discursive formation of *Senbu* among the Japanese authorities accompanying the implementation of propaganda activities. This part is followed by a discussion on the multi-target feature of propaganda activities and the uniqueness of media. To illuminate the trajectory of *Senbu*, chapter 2 traces the historical development of propaganda activities in Manchuria as well as the improvement of educational and technical infrastructures of *Senbu*. Chapter 3 reveals several specific methods of *Senbu* such as the production of hygiene films, various outdoor screening practices cooperated with other medical activities or lectures that were expected to enhance the efficiency of *Senbu*. Chapter 4 throws lights on how *Senbu* took advantages of religious ceremonies and their regular markets in order to gather audience groups in scarcely populated areas of Manchukuo. The final chapter summarizes how *Senbu* has transformed and been transformed by local society. This thesis attempts to fill the blank of historical studies about Manchukuo's propaganda activities in rural areas while provide a brand-new analytical perspective for unifying the multiple media in the field of media studies.

# アジア太平洋フォーラム・淡路会議

Asia Pacific Forum, Awaji Conference Japan

無断転載禁止/All rights reserved